

シリーズ 私の一冊の本

薬学部 山田浩 先生

有吉佐和子著 『華岡青洲の妻』

閲覧室 1階 913.6/A78 新潮社 出版

華岡青洲は 1804 年、エーテル麻酔が世に出るより 40 年余り先駆けて、世界で初めて全身麻酔による乳癌手術に成功した外科医です。有吉佐和子著の『華岡青洲の妻』は、その不朽の業績の陰に、麻酔薬「通仙散」を完成させるために自ら進んで人体実験に身を捧げた妻と母の、尊い美談の裏に繰りひろげられた青洲の愛を争う二人の女の確執を描いています。封建社会における「家」重視社会の中での嫁と姑の姿を浮き彫りにしながら、現代家庭にも通じるリアリティが感じられる名作です。

青洲は 1760 年紀州にて、医師の父・華岡直道と母・於継（おつぎ）の間に長男として生まれました。京都で 3 年間医学を学んだ後、帰郷して父の跡を継ぎ、診療に取り組む傍ら麻酔薬「通仙散」の開発研究に打ち込みます。診療を行ないながら、より良き治療法を開発しようという姿は、今の創薬の世界と相通じるものがあり興味深いところです。青洲の妻・加恵は、幼少時より憧れていた於継から囑望されて華岡家に嫁入りしました。青洲はその頃、京都遊学中で、花婿の座には「本草綱目」が置かれ、婿不在で新しい生活が始まりましたが、嫁と姑の仲は睦まじく幸せな毎日でした。ところが、青洲が帰郷した日から状況は一変し、一人の男を巡って嫁と姑の争いが始まることとなりました。

動物実験によって「通仙散」の効果を確認した青洲は、次に人間で試すにはどうすべきかと考えていました。そんな青洲の気持ちを察し、於継は実験台になると言い出し、それを聞いた加恵も自分で試すようにと迫ります。どちらも引かないのを見て、青洲は二人にやってもらおうと重い腰を上げました。肉親を臨床試験の被験者にする時のインフォームドコンセントが、この時適切に行なわれたのかは甚だ疑問ですが、薬の開発において人体実験は避けて通ることができない道です。結果として、青洲は母と妻に麻酔薬を飲ますことになりましたが、実際には、母には「通仙散」を殆ど含まない睡眠薬を、妻には「通仙散」を服用させます。このあたりの青洲、於継、加恵の心の動きが臨場感を持って感じられ、読者を強く惹きつけてやみません。

母「於継」は麻酔薬の完成を見る事なく亡くなり、実験中に、妻「加恵」が薬の副作用で失明するという犠牲を払いながら、麻酔薬「通仙散」は完成します。そして 60 歳の乳がん患者に対し、青洲は世界初の全身麻酔下の乳癌摘出手術に成功することとなります。

この本を読んで更に興味深かったことは、青洲の研究のプロセスが現代の薬の開発と同じステップを踏もうとしていることです。麻酔薬を開発するために、麻酔に有効な成分をもつ薬草「曼荼羅華」を栽培し、次いで犬や猫による動物実験を幾度も繰り返し有効性と安全性を確かめ、その後人における臨床試験を開始しています。現代の薬の開発でも、法の規制の下に、薬の候補物質の探索（基礎研究）から始まり、動物実験などの非臨床試験、次いで人における臨床試験（治験）が行なわれています。青洲が生きていた 18 世紀末から 19 世紀始め頃は、日本はもとより世界中でこのようなステップを踏んではいなかったのです。その意味で、青洲は現代の薬の開発のプロセスを踏もうとした最初の医師ともいえるでしょう。